

人はなぜ徳を積むのか

テーマ：発達と社会的行動

指導教員：井川純一

教養学部人間科学科

2055208 五百川悠夏

問題

「徳を積む」という言葉がある。善い行いをする
ことを徳と捉え、その行いを積み重ねることを言
う。当たり前のことだが徳を積む行動とその結果
には因果関係は存在せず、徳を積んだとしても自
分にとって必ず良い結果が起こるとは限らない。
では、なぜ人は徳を積むのだろうか。

徳を積む行動の心理的メカニズムとして、本研
究では、Locus of Control、公正世界信念、主観的
な運の強さに着目する。Locus of Control とは、
自分の行動に対する結果が自分の力でコントロ
ールされているのか、それとも外的な力によって
コントロールされているのかという認知様式で
ある。結果を自分の力でコントロールできている
と考えることは内的統制、反対に外的な力によ
ってコントロールされていると考えることは外的
統制と呼ばれる (Rotter, 1966)。

公正世界信念とは、人々は自分に相応しいもの
を手に入れている世界であると考えた信念であ
る (Lerner, 1980)。つまり、我々は、努力したら
報われ、悪事を行えば罰せられると考える信念で
ある。村山・三浦 (2015) は、公正世界信念を一
般的公正世界信念と不公正世界信念の因子に分
けている。一般的公正世界信念が強い人は、徳を
積むことで将来的に報われると考えるため徳を
積み、不公正世界信念が強い人は、徳を積んでも
意味がないと考え徳を積まないと考えられる。

また、「運」は、本来確率的な問題のため、自分
自身で結果をコントロールすることは難しい。し
かし、村上 (2002) は、自分は「運が強い」と思
う者ほど、その「強運」は努力によって得ることが
可能である (もしくは得た) と判断しがちである
ことを明らかにしている。努力は統制可能な要因
であるため、統制不可能な「運の強さ」さえも統
制可能な要因として扱われていると考えられる。

つまり、自分は運が強いと思っている人ほど、徳
を積んで結果をコントロールしようとすると思
えられる。

以上の議論から本研究では、これら 3 つの個人
特性が徳を積む行動に与える影響を検討する。

目的

本研究の目的は、徳を積む行動の心理的メカ
ニズムを明らかにすることである。Locus of Control、
公正世界信念、主観的な運の強さに着目する。

仮説

1. 内的統制が強いほど、徳を積む。特に、感情、
サポートの徳を積みやすい。
- 2a. 一般的公正世界信念が強いほど、徳を積む。特
に、モラル、サポートの徳を積みやすい。
- 2b. 不公正世界信念が強いほど、徳を積まない。
3. 主観的な運の強さが強いほど、徳を積む。特に、
感情、サポートの徳を積む。

方法

調査対象者 クラウドワークスを用いて募集し
た、127 名 (男性=68 名、女性=56 名、平均年齢
37.36 歳、SD=7.44 歳) であった。

予備調査

大学生 9 名を対象に、具体的な徳を積む行動に
関してテキストデータを収集した後、他グループ
メンバーによって意味的にまとまりのある項目
に分類集約した。その後、感情積徳、モラル積徳、
サポート積徳の計 13 項目の徳を積む尺度を作成
した。

本調査

鎌原ら (1982) の Locus of Control 尺度、村山、
三浦 (2015) の公正世界信念尺度、Darke &
Freedman (1997) の BIGL (Belief in Good Luck)
尺度を村上 (2020) が日本語翻訳したもの、予備
調査で作成した徳を積む尺度に回答させた。

結果

徳を積む尺度の探索的因子分析の結果、「感情・サポート積徳」5項目、「モラル積徳」3項目の2因子構造が抽出された。

仮説1について、Locus of controlと徳を積む行動の相関関係を確認したところ、感情・サポート積徳において中程度の正の相関 ($r=.34, p<.01$)、モラル積徳においては弱い正の相関が確認された ($r=.22, p<.05$)。仮説2aについて、一般公正世界信念との相関関係を確認したところ、感情・サポート積徳 ($r=.27, p<.01$)、モラル積徳 ($r=.27, p<.01$) とともに弱い正の相関が確認された。仮説2bについて、不公正世界信念との相関関係を確認したところ、感情・サポート積徳 ($r=-.09, n.s.$)、モラル積徳 ($r=-.07, n.s.$) とともに有意な相関は認められなかった。仮説3について、主観的な運の強さとの相関関係を確認したところ、感情・サポート積徳のみ弱い正の相関が確認され ($r=.25, p<.01$)、モラル積徳は有意な相関は確認されなかった ($r=.11, n.s.$)。各尺度の得点の平均値及び単相関の結果を Table1 に示す。

Table1 各尺度の得点の平均値及び単相関

	Mean	SD	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
(1) LOC得点	2.538	0.428	1.000					
(2) 一般的公正世界信念得点	3.344	1.021	.446 **	1.000				
(3) 不公正信念得点	4.303	1.009	-.524 **	-.341 **	1.000			
(4) BIGL得点	3.342	0.724	.304 **	.422 **	-.304 **	1.000		
(5) 感情・サポート積徳	3.647	0.778	.335 **	.273 **	-.094	.252 **	1.000	
(6) モラル積徳	3.982	0.768	.219 *	.274 **	-.066	.114	.395 **	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$

考察

分析の結果、内的統制が強いほど、感情・サポート、モラルの徳を積みやすいことが明らかになった。内的統制者は、自分自身の行動によって結果をコントロールできると考えるため、徳を積むという行動を通して、将来良い結果をもたらそうとしていると考えられる。また、一般的公正世界信念が強いほど、感情・サポート、モラルの徳を積みやすいことが明らかになった。公正な世界を信じる人は、善い行いをすれば将来良い結果が起こると考えるため、徳を積む行動をしやすいと考えられる。一方で、不公正世界信念と徳を積む行

動には関連は見られなかった。このことから、人はどちらの信念も有しており、公正世界信念は徳を積む行動に強く影響し、不公正世界信念は徳を積む行動には影響しない可能性が考えられる。

さらに、主観的に自分は運が強いと思っている人ほど、徳を積むことが明らかになった。幸運を信じることで自信が高まり、結果を自分自身でコントロールすることができると考え、徳を積み上げて良い結果をもたらそうとすると考えられる。モラルに関する徳を積まない理由として、自分は運が強いと考える人は、自分は特別な存在であると考え、モラルを守ることを重要視していない可能性が考えられる。本研究において、徳を積むというこれまであまり取り上げられてこなかった人間の不合理な行動の心理的メカニズムを明らかにしたことは、大きな意義である。

引用文献

- Darke, P. R., & Freedman, L. J. (1997). Lucky Events and Beliefs in Luck: Paradoxical Effects on Confidence and Risk-Taking. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23(4), 378-388.
- 鎌原 雅彦, 樋口 一辰, 清水 直治 (1982). Locus of Control尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討. *教育心理学研究* 30(4), 302-307.
- Lerner, M. J. (1980). The belief in a just world. In M. J. Lerner (Ed.), *The belief in a just world*. Boston, MA: Springer. pp. 9-30
- 村上幸史 (2002). 「運の強さ」とその認知的背景. *社会心理学研究*, 18(1), 11-24
- 村上幸史 (2020). 幸運と不運の心理学. 株式会社ちとせプラス
- 村山 綾, 三浦 麻子 (2015). 被害者非難と加害者の非人間化——2種類の公正世界信念との関連——. *心理学研究*, 86(1), 1-9.
- Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80 (Whole No.609), 1-28.